救われる前に助けてくださる神様

2020/6/20
佐々木正明

　私たちが今まで試みてきた伝道は、神の聖さを語り、人間の罪を説明し、イエス・キリストの十字架を教え、悔い改めを迫り、キリストを受け入れるように導く伝道でした。これが間違っているとは言いませんが、日本人に対しては、あまり効果が期待できない伝道であると、お話してきました。

　それで、日本人に分かりやすく、あまり違和感や警戒心を抱かせずに、天地創造の神様を信じさせる方法の、入り口付近までは披露してきたつもりです。そこでは、「神様を信じる」とか「信仰を持つ」とかいう、とらえどころのない抽象的表現は避け、もう少し具体的に、行動を表す「お願いする」という言葉を用いました。お願いするということは、その中に、たとえわずかであっても、信ずるという要素があるのです。信じるからお願いする、信頼するから頼み込むのです。たとえわずかでも、信じるという心を行動で表すことが大切なのです。

　そこで今回は、もう一歩踏み込んで、このあたりのことを考えてみましょう。

　私たちの神様、天地創造の神様は、人間が悔い改めて救われる前から、人間に働きかけ、悔い改めに導いてくださる神様です。まず、この点をしっかりと理解しましょう。私たちの感覚では、神様はあくまでも聖い神様で、罪人の願いなど聞き入れてくださらないと思いがちです。でも聖書を読むと、かえって罪人の中に働きかけ、罪人の願いを聞き入れられ、罪人を助けてくださる神様であることが分かります。

　神様がイスラエルの民をお救いになったのは、彼らが悔い改めたからではなく、彼らの呻き叫ぶ声、助けを求める声をお聞きになったからです。イスラエルの人々が神様を信じて忠実な人間になったから、血の奇跡、蛙の奇跡、ブヨの奇跡、ハエの奇跡、動物の死の奇跡を行ってくださったのではありません。彼らが自分たちの罪を悔い改めたから、腫れ物の奇跡、雹の奇跡、イナゴの奇跡、暗闇の奇跡を起こしてくださったのではありません。彼らが、神様のみ心にかなう立派な人々になったから、エジプト中の長子を殺してまで開放に導き、昼は雲の柱、夜は火の柱を持って道を示し、紅海を二つに分けて追撃してくる軍隊を滅ぼしてくださったのでもありません。

イスラエルの人々が十戒を与えられて、偶像礼拝をやめて主なる神様だけを礼拝するように命じられたのは、これらの奇跡を次から次へと見せられ、体験させられ、主が誰よりも強い神であられることを、いやおうなしに認めなければならなくなった後のことです。主の他にはだれも神としてはならないことも、主の助けの力を重ねて体験させられてから、命じられたことです。

現在の日本人も、当時のイスラエル人たちと同じように、真の神様を知らずに生きています。イスラエル人が知っていたのは、たぶん、自分たちの先祖アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神という名前程度だったことでしょう。だから彼らには、信じる以前、悔い改める以前に、まず、神様の助けを体験する必要があったのです。

現代の日本人も同じです。おぼろげな神認識しか持っていない日本人が、神を信じ、悔い改めるには、まず、神の力、神の助けを体験しなければならないのです。体験をさせないまま、神を信じさせようとすると、勢い、頭の信仰、理屈の信仰、観念的な信仰、教えへの同意、教理への合意、宗教の受容、宗教団体への加入になってしまい、本当の信仰には至らないで終わってしまいがちです。

問題は、私たちクリスチャンが、奇跡を持って助けてくださる神様を信じられなくなって、理論上の合意を求める「伝道」に陥ってしまっていることです。美しい感動的な物語を創作し、ドラマチックにお話し、信仰を勧めて決意を促すか、微に入り細に入り「神・罪・救いの三原則」を伝えて決心を迫るか、「四つの法則」を間違いなく説明してクリスチャンになるように励ますか、とにかく、観念的に終わってしまうのです。

そのために、私たちの周辺での改心の多くには、感動が伴わないのです。変化が起こらないのです。上手な説得や勧誘や論駁によって信仰を勧めるのではなく、神様の助けを体験してもらうように励ますべきです。日本人が体験によって神様を信じられるように、私たち自身の考え方を変える必要があります。

残念ながら、私たちの多くは、説得されてクリスチャンになったものです。神様のすばらしさを理屈によって説明され、納得させられてクリスチャンになりました。あるいは、クリスチャンと言われる人たちの、「立派な証」によって導かれました。そのために、私たちも同じようにして、周囲の人たちを説得し、納得させようとします。私たちの立派さを見せて、身近な人たちを導こうとします。そこに、生きておられる神様の力を見てもらおうとか、神様のみ業を体験してもらおうとかいう気持ちは、まったくありません。

私たちが説明し、納得させ、指導し、決心させなければならないために、伝道は「もの

すごく」困難な働きになるのです。伝道は難しいから証にしておこうとしても、自分たちの大多数は、「証になるほど立派なクリスチャン生活をしていないから」と、尻ごみをしてしまいます。自分たちが、証ができるほど立派になろうとすると、いつまでたっても不可能です。自分は立派になったと思うクリスチャンくらい、鼻持ちならない存在はありません。よく言われるように、自分は謙遜になったと思ったときほど、傲慢になっているときはないのです。

　私たちは、自分の立派さや知識や能力や技術で、証をするのではありません。そうではなく、「自分のようなとんでもない人間でも、神様の助けをいただくことができた」と、証をすべきなのです。立派な人間をお救いになる神は、当たり前の神です。でも、私たちの神様は、当たり前の神ではなく哀れみに富む神様です。どんなにしょうがない人間でも、くずのような輩でも、助けてくださいと心からお願いすれば、助けてくださるのです。「その良い例が、私です」と、自分の善良さや優秀さではなく、神様の哀れみを誇ればよいのです。証のために、自分が立派なクリスチャンになる必要はないのです。

　だれかに、「あんたそれでもクリスチャン？」と揶揄されたら、「そうなのよ！ 私はこんなにひどい惨めな人間だから、神様の助けがなくては生きてはいけないのよ。神様は、こんな私をも哀れんで助けてくださったのよ」と、ありのままの自分をさらけだして、答えればいいのです。「でも、こんな私だけど、今はこれでもずいぶん良くなったのよ。前には、それこそ、箸にも棒にもかからなかった人間だったんですから」と、立派な自分を見せびらかすのではなく、助けてくださった神様に栄光をお返しすればよいのです。

　そして、「私を助けてくださった神様は、きっと、あなたを助けてくださると思います」と、神様にお願いしてみる気持ちを起こさせることです。それから、遠慮がちに、「苦しんでいらっしゃるお気持ちに、土足で踏み込むような失礼なことになるかもしれませんが、あなたのためにお祈りをしてもよろしいですか？　もちろん、本当は、あなたが自分でお願いするのが一番なんですけど」とでも言って、お祈りしてあげることです。もしも素直にお祈りをさせてくださったら、自分でお祈りするように勧めてあげることです。

　お話された苦しみや悲しみや問題に対して、あなたが解決策を示したり、腕まくりをして乗り出したりする必要はありません。聞いてあげて、お祈りしてあげれば、それでよいのです。その上、本人が自分で祈るように励ましてあげれば、上出来です。あとは神様がその祈りの願いにお答えくださる番です。身勝手な祈りかもしれません。手前味噌な願いかもしれません。でも、神様はその願いにお答えくださるという信仰が、私たちの側になければこのようにすることはできません。

もちろん、神様は、私たちの願い通りに答えてくださるとは限りません。ほかの形で答えてくださることも、期待もしていなかった、もっと良い答えを与えてくださることもあるでしょう。筆者の先輩牧師が、いつも言っています。「神様が、僕の祈りにお答えくださらなくて本当に良かった。もし聞き届けられていたら、僕は、今の家内と結婚することにはならなかったからネェ。」 神様は、祈りを聞き入れないことによって、最高の答えをくださったのです。そのことをお教えして励ましてあげることです。

私たちの働きは、たとえてみるなら、良いお医者さんを紹介するようなものです。私たちが、病気についての知識を持っている必要は、ほとんどありません。紹介するお医者さんについても、詳しいことを知っている必要はありません。でも、自分が同じ病気の時、とてもよく治療をしてくださり、いまは健康になった。とても親切だった、とても誠実だった。だから、あの先生がいいと思うよ」と言うだけでいいのです。躊躇しているようだったら、できるだけ早く、行くように励ましてあげればいいのです。

その人が医者に行ったなら、後は医者の役割です。私たちが神様を紹介するように、神様にお願いすることを教え励まして、その人が神様にお願いしたなら、あとは、神様の責任、神様の役割です。神様は罪人の願いを聞き入れてくださる方なのですから、私たちが躊躇する理由はないはずです。それができないのは、私たちの不信仰です。一回の治療では治らないことがあります。3 回 4 回と行き続けることも必要になるでしょう。行き続けるように励ましてあげることです。

こうして、人間の原罪がどうの、神の聖さがどうの、キリストの無原罪がどうの、十字架がどうの、悔い改めがどうの、信仰がどうの、その他もろもろのどうのこうのを一切はぶいて、まず、神の力、神の助けを体験してもらうのです。神様の力を自分で体験するようにさせ、神様の恵みを実感させてからならば、罪の話をしても、悔い改めの話をしても、もっと受け入れられやすいのです。

ただし、神様は医者とは違います。医者は治療が終わり、治療費を払えばそれでおしまいです。ところが神様が求めておられるのは、助けを求めてきた人との良好な関係、暖かい交わりです。「治療が終わりました。支払いも終わりました。はい。さようなら」ではなく、「これから、仲良くしていきましょうね。これを機会に、お近づきになりましょうね。いつでも遊びに来てください。困ったときだけでなく、助けが必要なときだけでなく、いつでも気軽に立ち寄ってください」となることなのです。

ですから、気軽に神様をお訪ねすることをお勧めするのです。日本人なら、たいていの人は、自然の美しさの中に「神様のようなもの」を感じ、天然の荘厳さの中に「神々しい

方」の存在を意識し、豊かな刈り入れや収穫の時には、この方に感謝の気持ちを感じてきました。これからは、それをはっきり表現して、「神様。ありがとうございます。この美しい山の緑をありがとうございます。青い海をありがとうございます。白い雲をありがとうございます。黄金色の稲穂をありがとうございます。大漁の魚をありがとうございます。日々の恵みと守りをありがとうございます」とお祈りして、ひっきりなしに神様を訪問するようにお勧めするのです。

　そのようにして、心の片隅に感じていたおぼろげな感覚、自分は神様の恵みの中に生きているのだという、本能的感覚を明瞭にしてあげるのです。そうすると、この神様の前に、自分は充分な感謝をしてこなかった、神様を無視して生活をしてきた、神様の願いやお心などにはいっさい思いをめぐらせずに、勝手わがままに生きてきたという罪に気づき、本当の悔い改めをすることができるはずです。

　私たちは、罪人の叫びに耳を傾け、罪人の願いを聞き入れた下さる神様を信じているでしょうか。もしも信じているならば、私たちがこれまで経験してきたつらく悲しい出来事は、みな、同じようにつらい目にあっている人々や、悲しみに打ちひしがれている人々を、神様の救いの中に導きいれるための、とても有益な装備となるのです。